

狩野探幽たんゆうの作風 瀟洒端麗しょうしゃたんれいと

後藤程乗ていじようの作風

―無銘 後藤程乗「網針図」小柄―

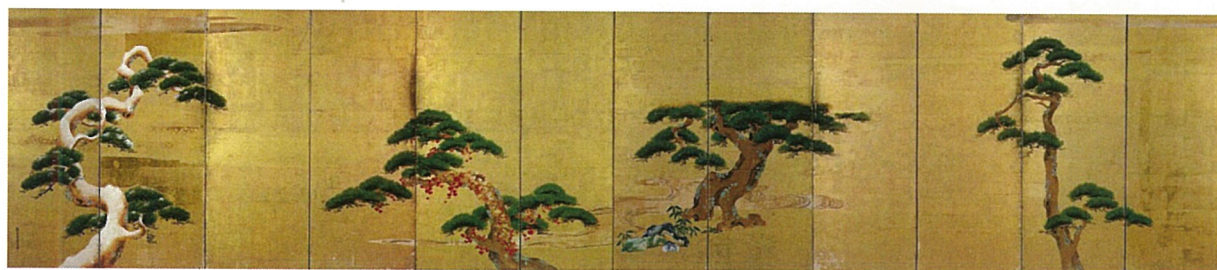
伊藤 三平

この小論は、前回の「狩野永徳の作風 恠恠奇奇かいがいきき」に通じる後藤徳乗の作品―徳乗「馬具図」小柄―と一緒にまとめていたのだが、紙幅しふくの関係で分割したものである。覇者の時代の桃山美術と幕藩体制確立期の江戸時代初期の寛永美術における絵師狩野派総帥そうすいの画風変化と、後藤宗家当主の作風変化の違いが理解できる。

1. 狩野派の画風を変えた狩野探幽

狩野探幽（慶長7（1602）～延宝2（1674）年）は永徳の次男孝信の子である。早熟の天才肌絵師でデッサンのような写生画も巧みである。元和3（1617）年に江戸幕府御用絵師となり、本拠を江戸に移し、父祖以来の桃山絵画からの流れを引き継ぎつつも、宋元画や雪舟せつしゆを学び、線の肥瘦せうや墨の濃淡を適切に使い分け、画面地の余白を生かした瀟洒端麗な画風を切り開き、江戸時代の絵画の基調を作った。徳川三代家光の在位期間（1623～1651）に重なり、『巨匠 狩野探幽の誕生』（門脇むつみ著）では、この時代の武士に求められた猛々まげたげしさよりも文武のバランス、人品の高さという武士像、穏やかで品の良い武士像に結びつくと述べている。

『本朝畫史ほんてうがし』（狩野永納著、松山義慎選 国書刊行会出版）では「筆墨は飄逸ひょういつ、傳彩でんさい（彩色）は簡易かんいであり、而して自然に狩野氏を一変して、おのずから一家をなす」と評している。



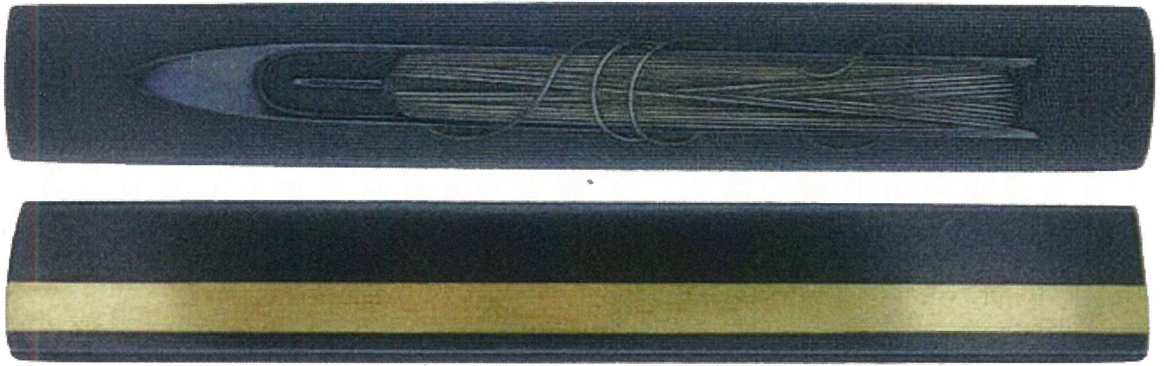
『広辞苑』で「瀟洒」は「①すっきりとてあかぬけたさま、②俗を離れてあっさりしているさま」の語釈があり、「端麗」は「かたち・すがたがととのって、うるわしいこと」とある。

揭示した探幽の「四季松図屏風」（大徳寺蔵）は、金地の画面は派手であるが、常緑樹の松で春夏秋冬（幼年、青年、壮年、老年期も表す）を描いた代表作の一つである。

2. 無銘・後藤程乗「網針図」小柄

この小柄は網を製作、補修する時に使用する「網針」を彫ったものである。使い方はインターネット上に多くの動画で紹介されているが、網の目に網針の舟形の先端を通して、ここに巻き付けられている糸（紐）をほどきながら、網目が崩れないように縛って網を作っていくものである。鳥や虫を捕らえるのにも網は使われ、現代では球技のネットにも使われるが、主たる用途は漁業であり、この道具に馴染みがあるのは漁師、網元、漁網製造業者である。

無銘であるが、日本美術刀剣保存協会は後藤家七代頭乗と極めている。また佐藤寒山氏の箱書には「加賀後藤の傑作」とある。加賀後藤には理兵衛家の頭乗、九代程乗や、徳乗の弟の七郎兵衛家の長乗から始まる勘兵衛家の覚乗などが含まれる。



私自身は次の理由から程乗の作品ではないかと推測している。

① 佐藤寒山氏が「傑作」と箱書するように、舟形の流線型の形状は正確で、先に行くに従い薄くなる肉置きは滑らかに美しい。整然と巻き付けられている糸（紐）は均一の太さで丁寧に彫り、その重なり具合から巻き付けている張力も想像できるほどである。網針全体は少し傾けて据えるという変化を付け、糸（紐）が解けてフワッと巻いている部分の彫りと併せて、キチンとした彫の持つ堅苦しさを和らげている。野田敬明が『金工鑑定秘訣』で頭乗の作風を評した「模様の据え方も風雅にして面白く、俗を離れたる別格の力ありて、鋭く激しく見ゆる」に当てはまり頭乗極めも一理ある。

② 『刀装小道具講座 2 後藤家編』の程乗作風解説の「銀の使い方が上手で、かつ多用」（糸（紐）は銀である）、「立て図の棒小柄がある」（画題が画題であり、立て図とも横図とも言えないが、程乗から棒小柄も多くなる）に加えて「小柄の入念作には小刀の差入れ口に魚子をまくことがある」（この小柄には存在する）が該当する。

③ 裏板に金を貼った仕立ては削継（斜めに入れる）、割継（縦に入れる）と称されているが頭乗の頃から見られる。割継の場合は端が中央に入れるのが普通だが、この小柄は中央を外した位置に、金の板（1mmも無い薄さだが金）を張り付けるという凝った仕立てである。頭乗から見られる裏板の仕立ての工夫が、より凝ったものになったのではなからうか（身分制度が厳しくなる中で、注文主が武家でない為に目立たない裏板に金を使ったとも想像している）。

④ 網針図は武士には馴染みの無いもので特別な注文だったと考えられるが、程乗には在銘品に尾張徳川家伝来の「權棹図」の三所物が現存している（写真は『後藤家十七代の刀装具』（佐野、根津、徳川美術館編）から小柄のみ）。他に在銘の「磯舟図」も存在する。權棹となると水軍の武将の所持品でもおかしくないが、いずれにしてもこのような特殊な図柄を注文する人物と交流があったと思われる。なお頭乗にも「漁夫」「舟人」の図柄があると『刀装小道具講座 2 後藤家編』（若山泡沫著）に記されている。

彫物の形が整って、特に巻き付けられている糸は整然（端麗）として、すっきりしている（瀟洒）が、華奢な印象ではなく、力強さを感じる作品である。前回に紹介した徳乗の「馬具図」小柄における引綱（差繩）の乱雑・自在・自由奔放さとは、時代が大きく変化したことを感じる。



3. 後藤程乗

後藤程乗（慶長8（1603）〜寛文13（1672）年）は狩野探幽とは一歳下の同年代である。父の顕乗（天正14（1586）〜寛文3（1663）年）は五代徳乗の次男である。兄の栄乗が宗家六代を継いだのが41歳で逝去し、その嫡男即乗が成人する寛永2（1625）年まで、顕乗が宗家七代を預かる。しかし八代即乗も寛永8（1631）年に32歳で逝去した為に、しばらくは顕乗が代行し、寛永12、13年頃に程乗が宗家九代を預かり、正保3（1646）年に即乗の子廉乗に十代を譲る。

顕乗と程乗は伯父寛乗（徳乗の弟長乗の子）の誘いで加賀前田家の御用を務めている。前田家には後藤家先祖の作品を三人で鑑定した作品が残っているが、この場合は寛乗が顕乗よりも三歳年上だが、宗家を預かった顕乗を首坐に記銘している。

程乗は律儀で品格がある性格で加賀藩主からも厚い信頼を得ていたと伝わる。兼六園の茶室夕顔亭に、程乗が石に伯牙断琴を彫った手水鉢があるが、これは五代藩主前田綱紀から「金工の名人でも石には彫れんだろう」と言われて彫り上げたという伝承が残されている。

4. 小堀遠江守政一（遠州）の茶道

この時代の美意識に大きな影響を与えていた茶道では、古田織部の次ぎの小堀遠州の茶に代表される。『桃山時代の美術』（奥平俊六著）などの資料から、小堀遠州の茶道の特色を抜き出すと以下の通りである。

- ① 自然な雅やかさを出す。利休の「わび」「さび」の世界は、その人独自の感性で創り出された極めて主観的なものだった。それに対して遠州は客観性を持たせ、多くの人が共感できる、「艶」を与えた。「綺麗さび」とも称される。

② 中国・唐物の文化が主流であった茶の湯を、日本風にアレンジし現在の姿に変えた遠州の功績は大である。遠州の建築や庭園を見ると、日本

古来のものと海外からの発想が組み合わされている。

- ③ 季節感を大切にしている。平安期に「雅」の文化があり、それを代表するものに和歌があった。遠州以前の茶の湯にはそれほど季節感は大切にされておらず、それまでの茶会では、亭主のその時々（みまひ）の思いが中心だったが、遠州は和歌を取り入れ季節感を用いて自分の思いを表現し、第三者にも解りやすいものにしていく。

網針という画題には「綺麗さび」「季節感」などの遠州の美意識は見いだせないが、時代の美意識の流れとして認識しておいていただきたい。『小堀遠州 綺麗さびの茶会』（深谷信子著）では、武将の主従関係の確認や政治的折衝が、武力という手段ではなく、將軍の御成りや大名同士の饗応の場などで行われるようになる寛永という時代にふさわしい茶道を、畿内を風靡していた文化を身に付けた遠州（近江出身で、長く伏見奉行を務める）が唐物ではなく雪舟の絵なども用いて確立していったことを述べている。狩野探幽の画風と通ずるものである。

5. 狩野探幽と後藤家との縁

狩野探幽は嗣子となる男子に恵まれなかった為に寛永11（1634）年の34歳の時に養子として後藤益信を養子に迎える。益信は徳乗弟長乗の嗣子立乗の三男であるが父立乗が寛永7年に45歳で没した為に、寛乗に養われていた。探幽に50歳を過ぎてから実子が生まれ、益信は探幽の鍛冶橋狩野家とは別家の駿河台狩野家を興す。

狩野家と後藤家は本阿彌家も含めて、京都の有力町衆で、ともに日蓮宗（法華宗）の熱心な信者であり、これまでも互いに縁戚関係を結んでいた。

寛永11年の後藤家の主立った人物は51歳の寛乗、48歳の顕乗、33歳の程乗がいた。

探幽養子の後藤家から出す件は、これまでの両家の交遊の結果と考えられるが、次のような事実もある。

小堀遠州の茶会記（『小堀遠州の茶会』深谷信子著）の寛永7（163

0)年11月28日朝の茶会に狩野主馬尚信しゅめ(探幽弟)、後藤勘兵衛寛乗、後藤縫殿介ぬいのすけ(呉服師)、末吉孫左衛門長方(朱印船貿易家)、平野藤次郎正貞(朱印船貿易家)の氏名が記録されている。

ちなみに狩野主馬尚信には嗣子常信がいた。茶道を通して交流があった寛乗に、尚信が兄探幽の養子の件を相談した可能性もあると思う。益信の養子実現はこの四年後である。

6. 小堀遠州と後藤顕乗・寛乗と狩野探幽

小堀遠州の茶会記史料を分析した『小堀遠州の茶会』(深谷信子著)には「第三章 大判座・金銀座・呉服師後藤家を招いた遠州茶会」の章がある。これによると、寛乗が寛永4年から正保3年まで8回、顕乗が寛永10年から正保3年まで8回、立乗は早世したので寛永4、5年の2回である。程乗は記録に無い。

また狩野探幽は江戸在住なので、遠州が江戸に向いていた寛永16年から寛永20年の間に3回を数えられる。明暦の大火時に探幽愛蔵の茶入れ「棚村」を持ち出した者が焼死して、茶入れが行方不明となる。その後京都で道具屋に持ち込まれ、探幽愛蔵品とわかり、探幽が買い戻して、このエピソードに因んで「都返り」と銘を付けたとされる。

おわりに

茶道の大きな流れとして千利休、古田織部、小堀遠州があるが、茶道には細川三斎、上田宗固、片桐石州などの流れもあり、乞食宗旦と称された千宗旦もいる。宗旦の三男宗室は慶安5(1652)年に加賀前田家に仕えている。宗旦はどこにも仕官しなかったが前田家との縁はあり、程乗の茶道は裏千家流の可能性もあると思う。